

# 識名原遺跡

—「(仮称) すまいるグループホーム識名」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2024(令和6)年3月

那覇市

# 識名原遺跡

—「(仮称) すまいるグループホーム識名」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2024(令和6)年3月

那覇市



## 例言

1. 本報告書は、合同会社すまいるの依頼を受けて、2021（令和3）年度に実施した「識名原遺跡緊急発掘調査」の成果を取録したものである。
2. 発掘調査は、合同会社すまいる及び株式会社福地組などの協力を得て、那覇市（市民文化部 文化財課）の指導のもと実施された。
3. 発掘調査及び資料整理・報告書作成では、下記の方々に協力・指導を得た。記して感謝申し上げる。
  - ・神谷直樹（合同会社すまいる） ・鳥袋啓子（株式会社福地組）
  - ・安里信栄、比嘉賀商（発掘調査作業員）
  - ・樋口麻子、山道峻（那覇市文化財課埋蔵文化財グループ）
  - ・阿部直子、高良夏枝、真栄城和美（那覇市文化財課会計年度任用職員）
4. 各地図・位置図は国土地理院の基盤地図の一部をトレース・編集して作成した。
5. 第3図および第4図は、国土地理院の基盤地図データに、「真和志地区旧跡・歴史的地名地図」那覇市文化局歴史資料室作成及び「開発調整マップ」那覇市教育委員会1998年3月版の一部を重ねて加筆・編集して作成した。
6. 本書の遺構オルソ画像作成は、調査時の撮影・解析を含めて山道が行った。
7. 第3表 出土遺物観察表の出土地番号は、第4表 出土遺物集計表の出土地番号と一致させた。
8. 本報告書の図及び表に記した座標値は世界測地系を基本とし、方位の北は方眼北を指す。
9. 層序の土色の判別には「新版 標準土色帖」日本色研事業株式会社発行を参照した。
10. 遺物の胎土・釉薬等の色調判別には、上記のほか「改訂版 慣用色名チャート」日本色研事業株式会社発行を参照した。
11. 本書に掲載した遺物・図面などの記録は、那覇市市民文化部文化財課で保管している。
12. 本書の執筆・編集は真栄城、山道の協力を得て、天久が行った。

### 【調査にかかる文化財保護法手続き】（抜粋）

- ・令和3年5月14日付、合同会社すまいるより那覇市教育長あて  
「埋蔵文化財発掘の届出について（依頼）」（文化財保護法第93条第1項）
- ・令和3年5月18日付、沖縄県教育長より那覇市教育長あて  
「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（回答）」教文第286号
- ・令和3年5月20日付、合同会社すまいるより那覇市長あて  
「発掘調査承諾書」
- ・令和3年6月9日付、那覇市教育長より沖縄県教育長あて  
「埋蔵文化財発掘調査について」（文化財保護法第99条第1項）那市文財第121号
- ・令和3年7月6日付、那覇市市民文化部文化財課長より沖縄県教育庁文化財課長あて  
「埋蔵文化財発掘調査の終了について（報告）」那市文財第157号
- ・令和3年7月6日付、那覇市教育長より那覇警察署長あて  
「埋蔵文化財の発見について（通知）」（文化財保護法第100条第2項）那市文財第158号

## 目次

例言	
第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	2
第Ⅲ章 調査経過と調査組織	
第1節 調査経過	6
第2節 調査組織	8
第Ⅳ章 層序と遺構	
第1節 層序	9
第2節 遺構	11
第Ⅴ章 遺物	21
第Ⅵ章 まとめ	29
報告書抄録	

## 挿図目次

第1図 調査区設定図	1	第8図 遺構断面図	16
第2図 那覇市の位置と遺跡の位置	3	第9図 遺物実測図(青花・褐釉)	23
第3図 遺跡の位置と周辺の文化財	4	第10図 遺物実測図(本土産磁器)	24
第4図 調査地の位置図	5	第11図 遺物実測図(沖縄産陶器)	25
第5図 調査区壁面図(南壁・東壁)	10	第12図 遺物実測図(カムイヤキ・陶質土器・ 土器・釘・ビー玉・瓦)	26
第6図 遺構検出平面図	14		
第7図 ビットの直径・深さによる色分け図	15		

## 図版目次

図版1 調査経過写真	7	図版6 遺構半裁断面	18
図版2 試掘時状況写真	9	図版7 遺構半裁断面・石器検出状況	19
図版3 南壁壁面オルソ画像	9	図版8 遺構半裁断面	20
図版4 遺構検出平面オルソ画像	11		
図版5 遺構半裁断面・検出状況	17		

## 表目次

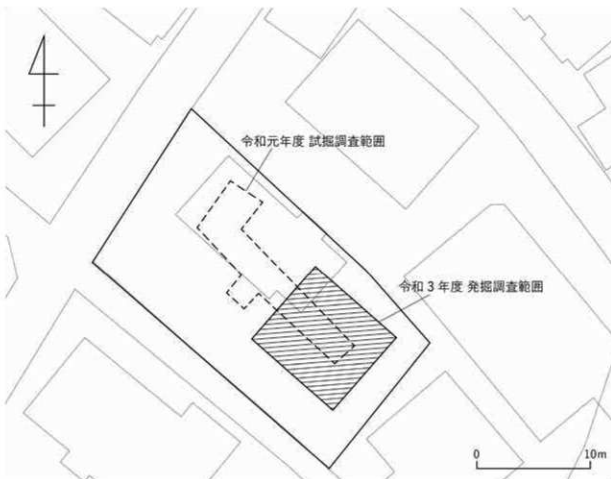
第1表 遺構観察表	12・13	第3表 出土遺物観察表	22
第2表 出土遺物観察表	21	第4表 出土遺物集計表	27

## 第I章 調査に至る経緯

今回の調査は那覇市識名4丁目地内における民間業者におけるグループホーム建築工事に伴って実施した緊急発掘調査である。

令和元年12月、民間業者よりグループホーム建築工事に先立ち埋蔵文化財の有無を照会するため、埋蔵文化財事前審査額が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地「識名原遺跡」の範囲に所在すること、過去に隣地で行った調査で堅穴住居遺構や土器片等が確認されたことから、当該地においても埋蔵文化財が包蔵されている可能性が高いため、試掘調査の実施について協力を依頼した。業者の同意を受け、令和2年1月6～10日の間に試掘調査を実施したところ、敷地の東側においてピットの広がりや近世から近代にかけての遺物が得られたことから「遺跡あり」の回答をした。しかし、この工事の掘削深度では遺跡への影響が少ないと判断し、基礎部分掘削の際に立ち会うこととした。

その後、令和3年5月に同業者より建築工事の設計変更について連絡があり、再度事前審査額が提出された。変更内容は、当初盛土して建築するところを切土に変更するもので、埋蔵文化財を包含する層に大きく影響が及ぶと判断された。遺跡保存について検討や調整を重ね、記録保存のための発掘調査を実施することに業者側の協力が得られたため、令和3年6月7日付で協定書を取り交わし、発掘調査事業として着手した。



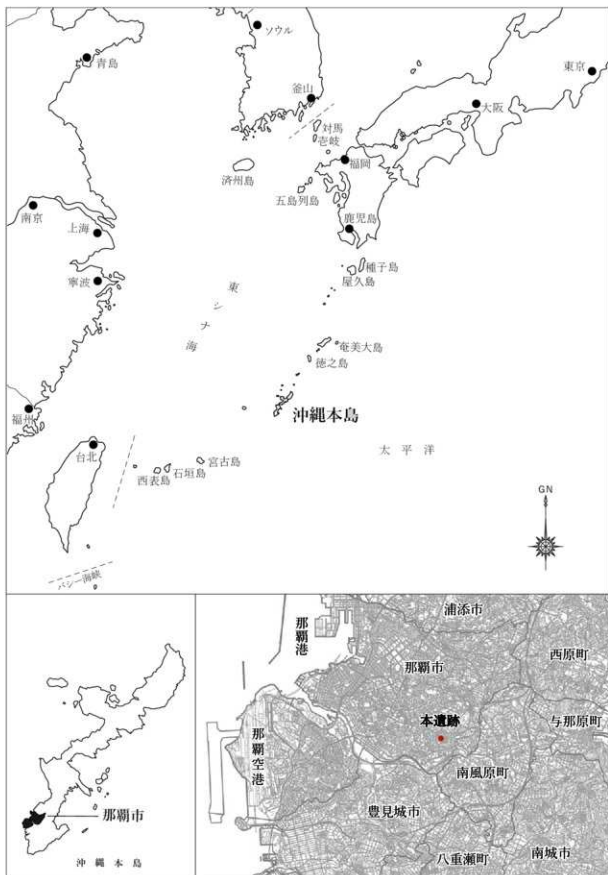
第1図 調査区設定図

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

本市は沖縄県最大の島である沖縄本島の南西部に位置しており、沖縄県の県庁所在地で県内人口の約21%（約31万人）を擁する沖縄の政治・経済の中心都市である。市域は南北約8km、東西約10kmで面積は約41km<sup>2</sup>を測る。市中央部は標高2～10mの沖積地が広がる平坦地で、南北及び東に向かって石灰岩の丘陵地帯が取り巻く。東から西へ市内を横断するように二級河川である安謝川・安里川・国場川が東シナ海へ注ぎ、河口は沖縄の海の玄関口である那覇港・泊港となっている。それぞれの河川に挟まれる首里、天久、識名地域及び国場川の南側にあたる小禄地域は、台地あるいは緩やかな丘陵地が形成されている。こうした地形の影響や歴史的成り立ちから、行政的に首里・那覇・真和志・小禄の4つに区分される。

遺跡の所在する識名は真和志地区に含まれ、国場川の北に位置する識名台地の南西部に位置する。識名台地は、那覇港や国場川河口にあったとされる真玉湊（今の真玉橋あたり）と首里城との中間地にあたり、それらを結ぶ街道である真珠道が縦断している。これにより古来より人や物などの往来が多く栄えていた地域と推察される。識名村は、かつての真和志間切の中心的集落であり、古くは1600年代に作成された琉球国高究帳の真和志間切に村名がみられる。現在より村域は広く、明治・大正期に分離するまで隣接する繁多川・真地の両字も識名村に含まれていた。集落の中心は小字識名原にあり、集落内や周辺には「シイマノ御嶽」「高安之嶽」（現東スウタキ）「川門之嶽」（現西スウタキ）「シモ門嶽」などの拝所が多くあり、識名ノロが管轄していたとされる。集落中心から少し離れたところには、琉球王家の別邸である識名園や琉球八社の一つにかぞえられる識名宮があり、王府とのつながりが比較的強い地域であるとみられる。また高台に立地するが水の豊富な地域として知られ、首里城での元旦の御水取りの儀式の際に識名集落内の湧水が使用されることがあった。吉方が午の時は「識名アク川」（現ウフガー）、未の時は「識名ケフリ樋川」（現ケブンジャー樋川）、申の時は「識名石シヤ川」（現東スカー）の湧水を使用したと琉球国由来記に記されている。

本遺跡は、名のとおり識名集落の中心地に広がる遺跡である。立地から識名集落の発祥に関連する遺跡と考えられるが、集落内にあるため著しく破壊を受けている。過去に数回、道路改良工事や個人住宅建築に伴って発掘調査を実施しており、部分的に遺構が残っていることを確認している。グスク時代の遺構や中国産陶磁器・カムイヤキなどの出土が確認されたほか、沖縄貝塚時代中期～後期の土器も出土した。識名台地ではほかにも、識名シーマ御嶽遺跡、識名園内遺跡、真地御殿後原遺跡、識名貝塚、石田遺跡など識名原遺跡に近い時期の遺構や遺物が確認されている遺跡が所在している。こうした状況から、識名台地は居住に適した点が多く古くから人々が住み続けている土地であるといえる。



第2図 那覇市の位置と遺跡の位置





第3図 遺跡の位置と周辺の文化財



第4図 調査地位置図

### 第三章 調査経過と調査組織

#### 第1節 調査経過

発掘調査は2021（令和3）年6月7～22日の期間で実施した。資料整理作業及び報告書作成作業は2023（令和5）年度に実施した。調査は地権者及び建築設計・施工業者からの多大な協力を得て行った。

発掘調査は地山層上面に検出される遺構の確認・記録を主な目的とした。南東隅を起点として、建物設計と方向を合わせて約8.5×10mの調査区を設定し、地山層上面までバックホウで掘削を行った。地表面から約0.7mで岩盤及び地山層が現われ始め、その地山層上面にビット・溝状の遺構などが広がる状況であった。調査区中央部で2019（令和元）年度に実施した試掘トレンチ部分が10～20cmほど低くなる以外は、遺構検出面はほぼ平坦である。

遺構検出状況を簡易写真測量にて記録後、遺構の掘削作業を行った。調査期間が限られていたため、近世以前のものと思定される遺構から優先して調査対象とした。

調査完了後は、日を空けず工事着手する予定だったため埋戻しは行わなかった。

以下に調査内容を略記する。

2021（令和3）年6月

- 7日（月）曇→雨 調査前状況写真撮影。その後重機による表土掘削作業を開始。地表面と0.5m掘削面にて磁気探査を実施した。（不発弾等はなし）調査区南側、地表から0.7～0.9m掘削したところで地山面にビット等の遺構検出を確認。掘削土の場外搬出を行う。
- 8日（火）晴 重機による表土掘削作業を進める。調査区全体にて遺構検出を確認し、重機掘削を終了した。掘削土の場外搬出を行った。調査区東壁・南壁の整形作業を進めた。
- 9日（水）晴 調査区西壁の整形作業、調査区西半分の遺構検出作業を進めた。掘削土の場外搬出作業を行った。
- 10日（木）晴 調査区全体の遺構検出作業を進めた。午後、遺構検出状況及び壁面の簡易写真測量を行った。
- 11日（金）晴 遺構の半裁作業を行った。半裁が完了したのから分層・記録作業を行う。
- 14日（月）雨 雨天のため現場作業中止。
- 15日（火）雨→晴 午後より遺構半裁作業を行った。
- 16日（水）曇 遺構の半裁作業を行った。半裁が完了したのから分層・記録作業を行った。
- 17日（木）曇/雨 遺構の半裁・完掘作業を行った。半裁が完了したのから分層・記録作業を行った。
- 18日（金）晴 遺構の半裁・完掘作業を行った。半裁が完了したのから分層・記録作業を行った。
- 21日（月）雨→曇 午後より遺構の半裁作業を行った。半裁が完了したのから分層・記録作業を行った。
- 22日（火）曇→雨 全体清掃をして午後に完掘状況の簡易写真測量を実施した。その後撤収作業を行った。



1. 着手前状況（西から）



2. 重機掘削（南から）



3. 磁気探査作業（南から）



4. 排出土運搬（東から）



5. 壁面整形作業（北から）



6. 遺構面検出作業（南東から）



7. 遺構半裁作業



8. 写真撮影

図版1 調査経過

## 第2節 調査組織

本遺跡の調査組織は以下の通りである。

発掘調査：令和3年度、資料整理：令和5年度

事業主体	那覇市	市長	城間 幹子 (令和3年度)、知念 覚 (令和5年度)
	市民文化部	部長	比嘉 世顕 (令和3年度)、渡慶次 一司 (令和5年度)
		副部长	加治屋 理華 (令和3・5年度)
事業所管	文化財課	課長	大城 敦子 (令和3年度)、上原 清実 (令和5年度)
調査統括		副参事	玉城 安明 (令和3年度)、外間 政明 (令和5年度)
調査事務		主査	宮里 浩子 (令和3年度)、東江 俊弥 (令和5年度)
		主任主事	東江 俊弥 (令和3年度)、知念 麻衣 (令和5年度)
調査担当	埋蔵文化財グループ	副参事	玉城 安明 (令和3年度)
		主 幹	樋口 麻子 (令和5年度)
		専門員主査	樋口 麻子 (令和3年度)
		主任専門員	當銘 由嗣 (令和3年度)
		主任学芸員	天久 瑞香 (令和3・5年度)
		主任学芸員	吉田 健太 (令和5年度)
		学 芸 員	山道 峻 (令和3・5年度)
		埋蔵文化財専門員	阿部 直子 高良 夏枝 (令和3・5年度)
開発調整グループ	主 幹	仲宗根 啓 (令和3・5年度)	
	専門員主査	當銘 由嗣 (令和5年度)	
	主任学芸員	吉田 健太 (令和3年度)	
	学 芸 員	狩俣 優里 (令和5年度)	
	主 事	木野 沙央里 (令和3・5年度)	
	埋蔵文化財専門員	徳元 剛 渡辺 幸夫 (令和3・5年度)	
		糸数 栗葉 玉城 美野 島 弘 (令和3年度)	
	内間 靖 玉城 安明 (令和5年度)		

文化財グループ

歴史博物館グループ

壺屋焼物博物館グループ

発掘調査作業員 (令和3年度：原因者側直接雇用)

安里 信栄 比嘉 賀商

## 第IV章 層序と遺構

### 第1節 層序

今回の調査では確認された基本層序は以下のとおりである。

- I a層：石灰岩クラッシャー層。現代の地表整地層。
- I b層：現代の建物解体時の造成層。
- I c層：石灰岩クラッシャー層。近代の整地面。
- I d層：2.5YR3/2 黒褐色で粘性の強いシルト層。しまりが強く、石灰岩礫を多く含む。炭の小塊や瓦片、近代の陶磁器片を含む。
- II層：7.5YR4/4 褐色で粘性がやや強いシルト層。しまりはやや強い。炭や焼土の小塊が少し入る。  
調査区の中で標高の高い北東隅で風化岩盤の間にもみ堆積が確認できた。遺物は沖縄産陶器片等がわずかに入っている。近世以前の耕作・造成層か。
- III層：地山（マージ）。明るい褐色で粘性・しまりが強い。遺構検出面。

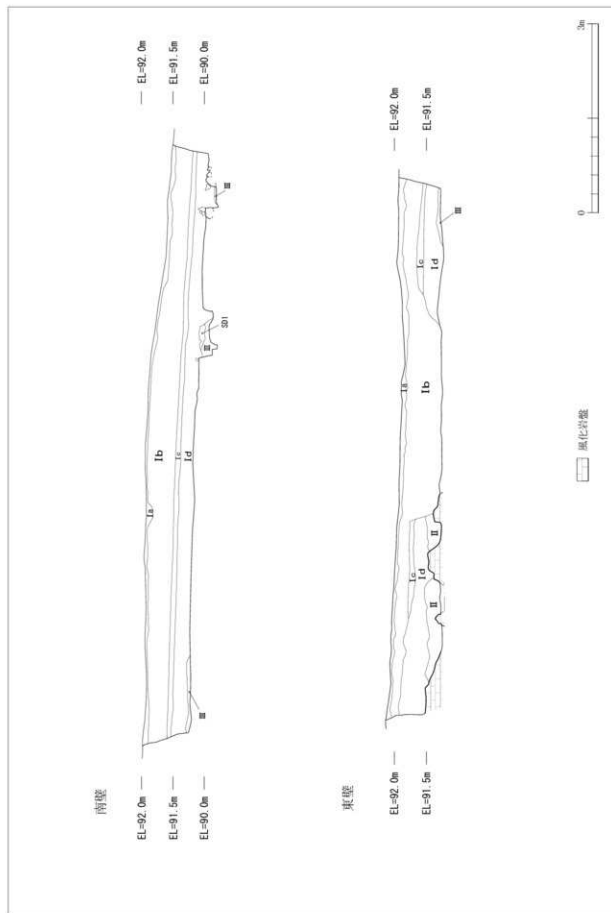
調査区全体において近現代の造成であるI層が広がっており、地山面まで堆積していた。調査区南東側から北側にかけては、地山検出面とはほぼ同じ標高で石灰岩の風化岩盤が露頭しており、その岩盤の隙間にII層の部分的な堆積が確認できた。I層が下層を水平に削る、あるいは大きく掘りこんでいる状況や、地山面・風化岩盤が平坦に検出している。これは試掘調査の際に敷地の西側でも同様な状況が確認されており、近代に建物の建築などに伴って敷地全体的に切土・造成といった土地改変が行われたと考えられる。



図版2 試掘時状況 左：トレンチ東側（西から）、右：トレンチ西側（東から）



図版3 南壁オルソ画像



第5圖 調査区壁面図（西壁・南壁）

## 第2節 遺構

今回の調査で確認された遺構は土坑16基、溝状遺構2条、ピット39基である。検出時の平面形状が円形のをピット、筋状のを溝、それ以外の不定形あるいは隅丸方形状のを土坑とした。調査期間が限られており、検出した遺構全てを掘削して調査することが難しく、ピットを優先して掘削し調査した。



図版4 遺構検出平面オルソ画像

### 1 土坑 (SK)

検出時の平面形状でピットと溝以外を便宜上土坑として取り扱った。輪郭が明瞭でないもの、不定形なもの、広範囲に広がるものが多く、これらは近現代の土地造成等の際の攪乱である可能性が高いと判断し、遺構掘削の優先度を低くした。また、検出面でスチール缶やガラスなどが出土しており、近現代の遺構である可能性が高いものも掘削の優先度を低くした。そのため部分的な断面状況の確認しかできず、明確な性格を捉えられなかったものが多い。

SK4は土坑側面に石組を持つ方形の土坑である。調査区西隅に位置するため、本来の遺構全



体は検出してない。北東側では地山に直接30～40cmの切石を配置し石組を構築しているが、南東側では10cmほど土を入れた上に人頭程度の面が不明瞭な礫を積み上げている。東壁には同程度の大きさの礫がみられることから、2段以上石が積まれていた可能性がある。規模や形状はシーリと呼ばれる廃棄土坑に似ているが、覆土から出土する遺物の量はあまり多くなく、その中でも獣骨等は出土していない。

## 2 溝状遺構 (SD)

調査区北西側で2条検出した。SD 1は南西—北東に伸びる。SD2は南西—北東と北西—南東へL字状に伸びる。両方とも以前建てていた建物の軸と近似しており、建物の基礎跡あるいは排水溝跡と考えられる。SD2がSD1を切っており、SD2のほうが構築時期は新しい。覆土の掘削が部分的であり、出土遺物もわずかなため時期は明確ではないが、近世—近代と考えられる。

## 3 ビット (SP)

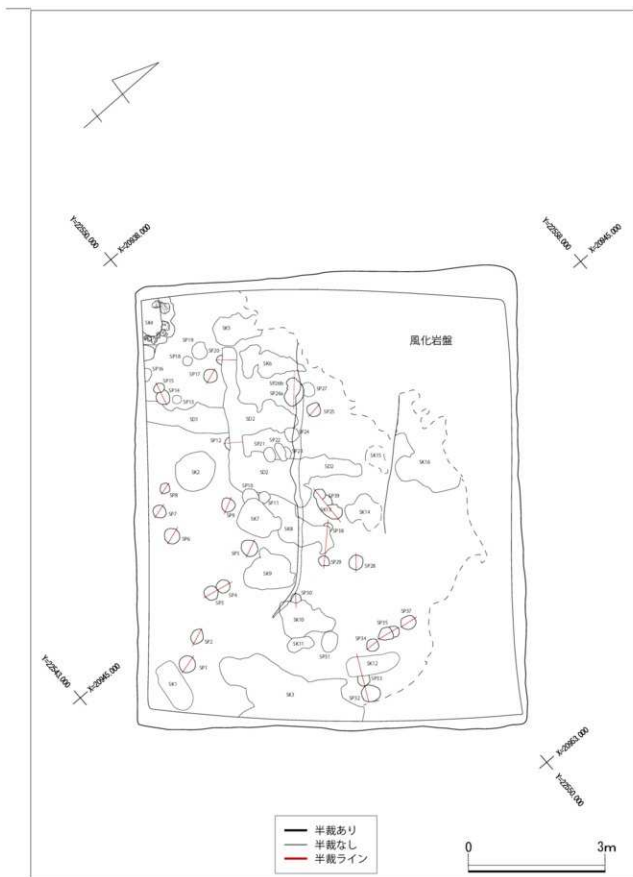
風化岩盤が露出している部分を除いて調査区全面に分布している。直径20～30cmのものが多い。深さは20cm前後のものが多いが、これは構築された当時の深度ではなく、後世の土地造成などにより上部が切削されていると考えられる。検出面・断面で明確な柱痕が確認できたものは少ない。地面に対して垂直に近い角度で掘削し、基底部はやや丸みを帯びるか水平を呈するものがほとんどであった。覆土は暗褐色を呈するものが大半で、一部暗褐色～黒褐色を呈するものがみられた。覆土からはグスク時代のものと思われる土器片が出土しており、近世より古い時期に構築された可能性が高いと考える。

建物プランを検討するため、直径と深さでの分類を試みた。全体の数が少ないことや未掘削のものもあるため、簡易的な分類にとどめた。覆土の色調等は大きな差異がみられなかったため、今回は分類の基準としなかった。結果としては、同類型が調査区全体に分散する状況がみられ今回の調査範囲内で明確な掘立柱建物のプランを想定することはできなかった。しかし、等間隔に並ぶように見える部分もあり、調査区外に建物プランが広がっている、あるいは柵としての利用が考えられる。(第7図)

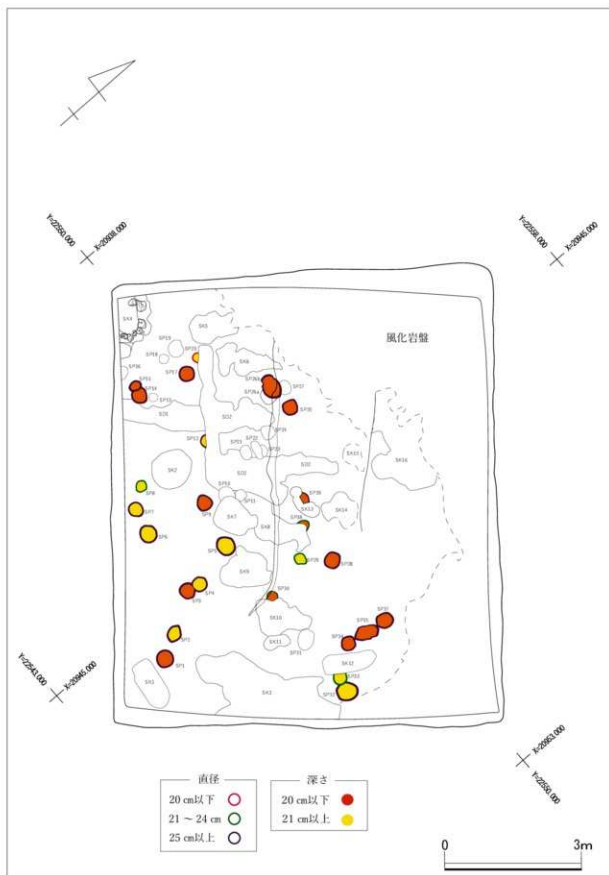
第1表 遺構観察一覧

遺構番号	遺構種類	直径 (cm)	深さ (cm)	出土遺物	覆土状況	備考
SD 1	溝	巾40～80	10	陶質土器 ほか	暗褐色 やや砂質、炭・焼土粒少、しまりやや弱、粘性弱、マーシ粒—大粒やや多	
SD 2	溝	—	15～	沖掘ほか	暗褐色 炭・焼土少、しまり弱、粘性やや強、マーシ粒—小ブロック多(とくに下層が多い) 石灰質小レキを少し含む	
SK 1	—	—	—	—	—	近現代の地誌調査
SK 2	—	—	—	—	—	近現代の地誌調査
SK 3	—	—	—	—	—	掘削とする
SK 4	土坑	巾50 地長110	18	沖掘ほか	石灰質レキを方角に配する土坑、覆土、暗褐色 炭・焼土粒少、しまり弱、粘性やや強、マーシ粒少	近世—近代の石組土坑
SK 8	土坑	不定形	3～19	なし	1: 暗褐色 炭・焼土少、しまりやや弱、粘性やや強、マーシ粒—大粒少	
SK 9	—	—	—	—	—	
SK 10	土坑	—	—	—	1: 暗褐色 炭・焼土少、しまりやや弱、粘性やや強、マーシ粒やや多、石灰質を数cm—粒で少し含む	
SK 11	—	—	—	—	—	
SK 12	土坑	巾45 長さ130	20	土器	1: 暗褐色 炭・焼土少、しまりやや弱、粘性やや強、マーシブロック状に多く混じる	
SK 13	土坑	不定形	5～23	沖掘ほか	1: 暗褐色 炭・焼土少、しまり弱、粘性やや強、マーシ粒多	
SK 14	—	—	—	—	—	掘削とする

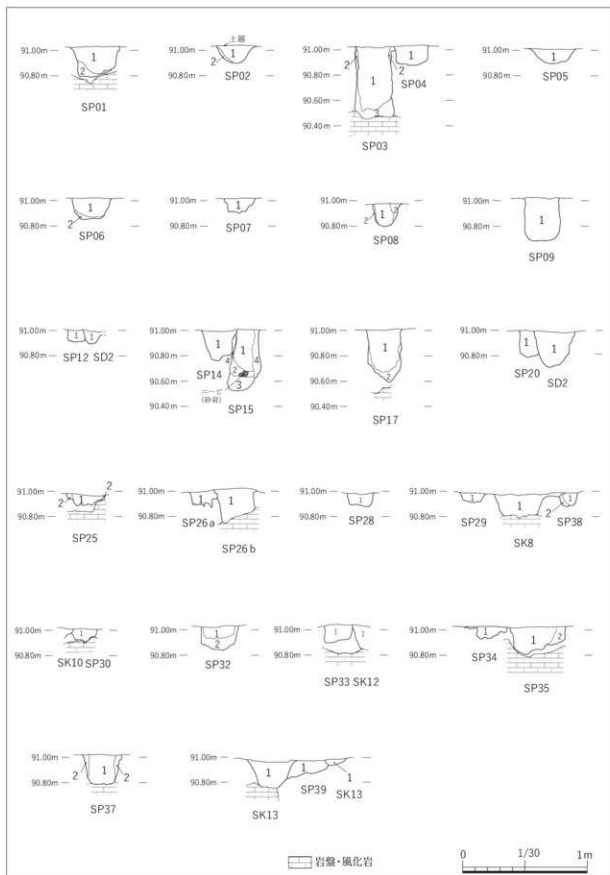




第6図 遺構検出平面図



第7図 ビットの直径・深さによる色分け図



第8図 遺構断面図



1. SD1・2



2. SD1



3. SK4



4. SK10・SP30



5. SK13・SP39 検出状況



6. SK13・SP39



7. SP1



8. SP2

図版 5 遺構半裁断面、検出状況



1. SP3-4



2. SP3



3. SP4



4. SP5



5. SP6



6. SP7



7. SP8



8. SP9

图版6 遺構半截断面



1. SP12·SD2



2. SP12 石器出土狀況



3. SP14·15



4. SP15



5. SP17



6. SP20·SD2



7. SP25



8. SP26

图版 7 遺構半截断面





1. SP28



2. SP29



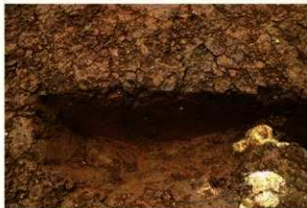
3. SP29-SK8-SP38



4. SP32



5. SP33-SK12



6. SP34



7. SP35-36



8. SP37

圖版 8 遺構半截断面、石器檢出

## 第V章 遺物

出土遺物は、試掘調査で73点、本調査で269点、合計342点を数えた(第4表)。調査区壁面清掃時と遺構検出作業時の数が多く、そのほとんどが攪乱層であるI d層からの出土である。ここからの遺物は沖縄産陶器類や本土産の磁器が多く、器種も碗・皿・壺・土瓶など器種も多い。いずれも日用雑器の類で、近世～近代の民家に伴う遺物としては一般的なものと思われる。このほか近現代の陶磁器類のほか中国産の青花や褐釉陶器がわずかに混じる。

遺構からは土器が多く出土している。出土点数は全体の遺物数に比べて多く見えるがいずれも小片で器種の判然とせず、図化が困難なものがほとんどであった。そのためビット埋土から出土した土器の口縁部も、図化せず集計だけにとどめた。土器のほか石材と考えられる滑石片が1点得られている。

以下、主な出土遺物について種類ごとに概略を列記し、第2・3表に図化した遺物についての個別の観察所見を示す。

**輸入陶磁器** 中国産青花9点、褐釉陶器1点が出土。青花は粗製のものが多い。

**本土産磁器** 総数19点出土。碗・皿・おろし器などの日用雑器のほか人形の一部分が出土した。

**カムイヤキ** 徳之島カムイ窯の類須志器。SD1から1点のみ出土。小片のため器種は不明。

**沖縄産陶器** 総数100点出土。日用雑器らしく碗類・鍋・急須・鉢など器種の数は多い。施釉陶器のほうが多く出土している。

**陶質土器** アカムスーと呼ばれる軟質の焼物。総数52点出土。ほぼ土瓶か鍋である。

**土器** 総数66点出土。前述のとおり胴部の小片がほとんどで器種の判別は困難である。概観して胎土が泥質あるいは泥砂質で器面があばた状を呈するものが多く、グスク土器と思われる。一部のものはグスク時代より古い時期の土器の様相を呈するものもみられるが、前述のとおり胴部小片のため、判別には至らなかった。

第2表 出土遺物観察表

### 中国産青花

検出番号	器種	部位	法量 (cm)			表地	観察事項	出土地番号	備考
			口径	器高	底径				
第9国 1	碗	口縁部	-	-	-	浅黄緑 10Y R8/4	外面文様あり筆描、内外面透明釉、外反口縁	24	福建・広東系
第9国 2	碗	口縁部	-	-	-	浅黄 2.5Y 8/3	内外面青白透明釉、外反碗、外面・文様あり、内面：口唇に墨線	23	
第9国 3	碗	口縁部	-	-	-	浅黄緑 10Y R8/4	外面文様あり、直口碗、内外面青白透明釉	6	
第9国 4	碗	口縁部	-	-	-	白色 10Y R9/1	外面花文様、内外面青白透明釉、直口碗	13	
第9国 5	小碗	底部	-	-	40	浅黄 2.5Y 8/4 (黒粒を少し含む)	内外面青白透明釉、外面・文様あり	2	

第3表 出土遺物観察表  
褐釉陶器

検出番号	器種	部位	法量 (cm)			素地	観察事項	出土地番号	備考
			口径	器高	底径				
第9回 6	不明	胴部	-	-	-	にぶい糖 5YR5/4 (石英・砂粒を少し含む)	内外面: 褐色釉	25	

本土産磁器

検出番号	器種	部位	法量 (cm)			素地	観察事項	出土地番号	備考
			口径	器高	底径				
第10回 7	小瓶	口~底部	-	-	-	褐色色 2.5Y9.2/05 (黒粒子)	内外面: 透明釉、赤口縁・銅板転写 (黒色) 文様あり、 唇付輪跡あり	25	龍江・美濃
第10回 8	瓶 (クロム青磁)	口~底部	8.2	-	3.0	白N9.5	内外面: クロム釉、ガラス質 外面面取り、外底無釉	9	龍江・美濃
第10回 9	小瓶 (クロム青磁)	底部	-	-	2.8	褐色色 2.5Y9.2/05 (黒色粒少し含む)	内外面: クロム釉、外面縁7割文様 外底無釉	19	龍江・美濃
第10回 10	おろし器	口~底部	現在最大長さ (15.4) 現在最大幅 (径) 0			白色	内外面: 透明釉	19	

沖縄産施釉陶器

検出番号	器種	部位	法量 (cm)			素地	観察事項	出土地番号	備考
			口径	器高	底径				
第11回 11	小瓶	口縁	7.2	-	-	黄灰 2.5Y7/1 (一部赤黄)	内外面: 透明釉、唇付口縁、外面面取り	25	
第11回 12	瓶	口~底部	-	-	-	にぶい黄糖 10YR7/3	内外面: 白化粧灰、透明釉、内底縁口輪跡少しアルミナ付着 唇付輪跡あり、外面印花文	1	
第11回 13	瓶の蓋	上部~下部	つまみ径 (5.0)	-	12.0	にぶい黄糖 10YR7/3	外面: 唇キープ釉、内面: 白化粧のみ	19	つまみ径5.0cm
第11回 14	瓶	口縁部	3.6	-	-	赤灰 2.5YR5/1	内外面: 黒褐色釉	23	
第11回 15	瓶	器身	16.4	-	-	黄灰 10YR5/1 (白化粧)	外面: 黒釉	26	

沖縄産無釉陶器

検出番号	器種	部位	法量 (cm)			素地	観察事項	出土地番号	備考
			口径	器高	底径				
第11回 16	瓶	胴部	-	-	-	灰赤 10R5/2 (白色粒を少し含む)	外面: 淡褐色、外面唇部まで沈濁 内面: 黒灰色、 内面輪跡あり	7	徳利

カムイヤキ

検出番号	器種	部位	法量 (cm)			素地	観察事項	出土地番号	備考
			口径	器高	底径				
第12回 17	不明	胴部	-	-	-	にぶい中黄 5YR4/3 (白色粒少し含む)	内外面: 灰色、外面へら削り、内面叩き目あり	25	

陶質土器

検出番号	器種	部位	法量 (cm)			素地	観察事項	出土地番号	備考
			口径	器高	底径				
第12回 18	土瓶の蓋	蓋	-	-	-	糖 5YR6/6	宝珠型、縁がへら砂粒等を今より多く含む。	26	
第12回 19	瓶	器身	-	-	-	糖 5YR6/6	唇が付着	27	

瓦

検出番号	器種	部位	法量 (cm)			粘土	観察事項	出土地番号	備考
			口径	器高	底径				
第12回 20	不明	胴部	-	-	-	にぶい糖 5YR6/4	記号無し、内外面ともあはれた状を呈する。	13	テラコッタ
第12回 21	不明	胴部	-	-	-	赤褐色 (石英等多く含む)	凹砂質内面に凹痕あり、唇付着	11	

金属製品

検出番号	種類	器種	法量 (cm・g)			観察事項	出土地番号	備考
			長さ	幅	重量			
第12回 23	鉄製品	角釘	5.5	-	7.0	全体的に錆が付着、頭部一部欠損、角釘	26	
第12回 24	鉄製品	角釘	2.8	-	2.0	頭部欠損、先端欠損、全体に錆が付着、角釘	32	

ガラス製品

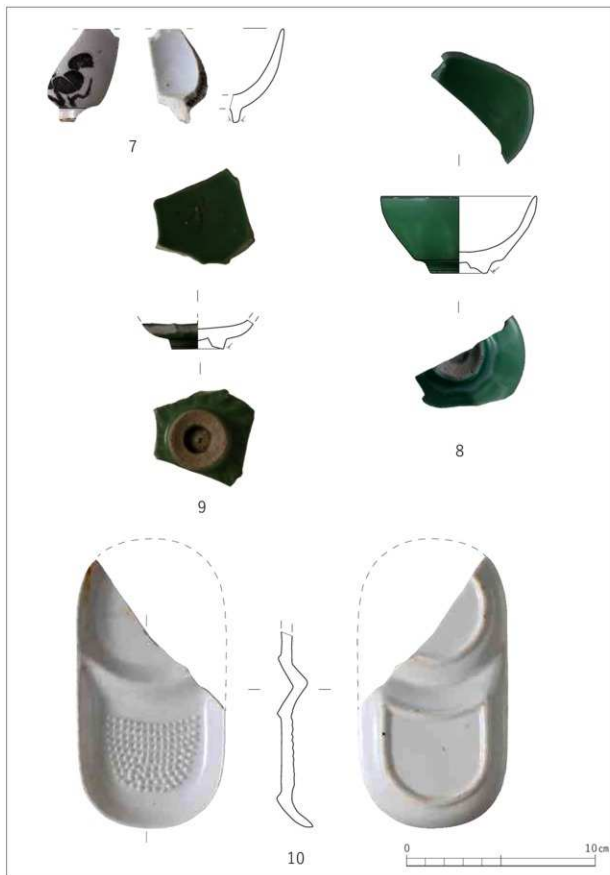
検出番号	種類	器種	法量 (cm・g)			観察事項	出土地番号	備考
			長さ	器高	重量			
第12回 24	ビー玉		-	-	5.0	全体は透明で、中に黄緑色の着色が凝状に5本入る	8	

瓦

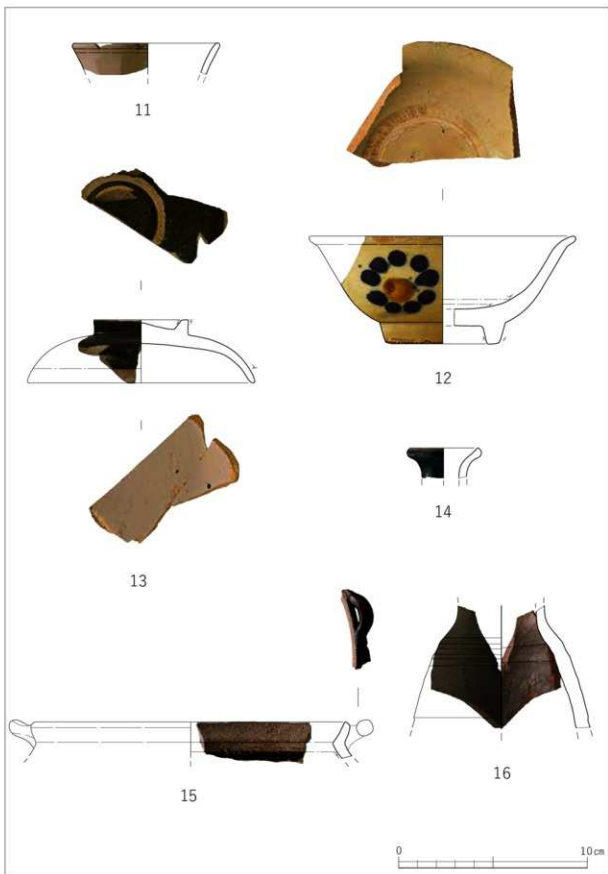
検出番号	種類	種類	部位	色調	観察事項	出土地番号	備考



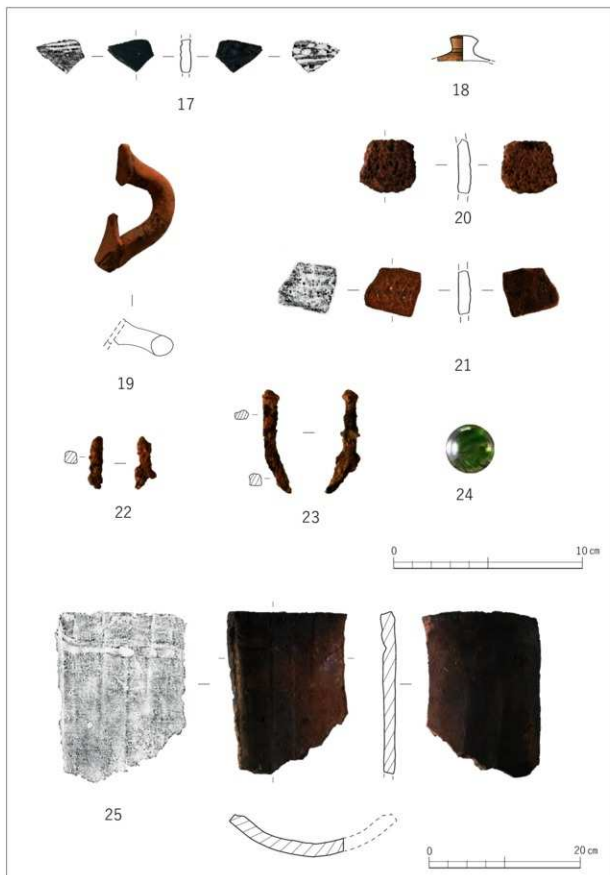
第9图 中国産青花（1～5） 褐袖陶器（6）



第10图 本土産磁器 (7~10)



第 11 図 沖縄産施釉陶器 (11～15) 沖縄産無釉陶器 (16)



第12図 カムイ焼 (17) 陶質土器 (18・19) 土器 (20・21) 釘 (22・23)  
 ビー玉 (24) 瓦 (25)





## 第Ⅵ章 まとめ

今回の調査では、地山面で土坑16基、溝状遺構2条、ピット38基の遺構を確認した。近現代の擾乱により遺物包含層はほとんど残っておらず、グスク時代から近世・近代の遺構が同じ面で検出された。石組をもつ方形の土坑や溝状遺構、一部の土坑は住居に伴う遺構であると考えられる。埋土からは近世から近代にかけての沖縄産陶器や陶質土器などが出土した。ピット群は、近現代に擾乱を受けていることや全ての遺構を掘削できなかったことで調査範囲内では明確な建物プランが設定できなかった。しかし、直径25cm以上で深さ20cm以下のものと直径25以上で深さ21cm以上のものが多く、ある程度の規格性がみられた。また等間隔で列をなして分布しており、建物あるいは柵などの柱穴であると想定される。埋土からはグスク土器などが出土しており、主にグスク時代の集落跡と思われる。

今回出土した土器は胴部小片がほとんどで形式や器形が窺えるものはなかったが、一部はグスク時代より古い沖縄貝塚時代後期土器の様相がみられた。識名原遺跡は過去に数回発掘調査が実施されており、その際にもグスク土器や中国産陶磁器のほか沖縄貝塚時代後期の土器が出土している。特に隣接する試掘調査地では、沖縄貝塚時代中期（縄文時代晩期相当）と思われる土器・骨製品の出土や跡が確認されており、同時期の遺物が採集された識名貝塚との関連が示唆されている。今回の調査成果を合わせることで、識名集落の発祥の時期がグスク時代より遡る可能性がより高まったといえる。

今回の調査により、識名集落は遺跡の存在を強く意識して開発事業との調整をしていく必要がある地域であると再認識した。本調査地は、集落の中心に近く連続して人々が居住していた土地であること、識名台地の段丘崖に近く遺跡範囲の縁辺部とされている場所であることを考慮すると、グスク時代の遺構がよく残っていたといえる。今後、縁辺部の外側への遺跡範囲の広がりが期待される。

### 【参考・引用文献】

- ・宜野湾市文化財調査報告書第46集「市内埋蔵文化財発掘調査報告書」 宜野湾市教育委員会 2010年3月
- ・宜野湾市文化財調査報告書第53集「市内埋蔵文化財発掘調査報告書3」 宜野湾市教育委員会 2017年3月
- ・宜野湾市文化財調査報告書第57集「市内埋蔵文化財発掘調査報告書4」 宜野湾市教育委員会編 2019年2月
- ・『識名誌』 那覇市識名自治会 2000年
- ・『統計那覇 令和6年1月 No.188』 那覇市企画調整課統計グループ 2024年1月
- ・那覇市文化財調査報告書第5集「那覇市の遺跡－詳細分布調査報告書－」 那覇市教育委員会 1982年3月
- ・那覇市文化財調査報告書第34集「識名シーマ御嶽遺跡」 那覇市教育委員会 1997年3月
- ・那覇市文化財調査報告書第49集「識名原遺跡」 那覇市教育委員会 2001年3月
- ・那覇市文化財調査報告書第69集「神心寺跡」 那覇市教育委員会 2006年2月
- ・那覇市文化財調査報告書第74集「那覇市内遺跡1」 那覇市教育委員会 2007年3月
- ・那覇市文化財調査報告書第116集「真地御殿後原遺跡」 那覇市 2022年3月
- ・日本歴史地名大系第48巻「沖縄県の地名」 株式会社平凡社 2002年12月
- ・『繁多川100周年記念誌 繁多川』 繁多川自治会 2012年6月
- ・吉田健太「識名原遺跡出土の竪穴住居跡－識名原遺跡試掘調査報告－」『壺屋焼物博物館紀要第20号』 那覇市立壺屋焼物博物館 2019年3月

## 報告書抄録

書名	識名原遺跡							
副書名	「(仮称)すまいるグループホーム識名」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査							
巻次								
シリーズ名	那覇市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第119集							
編著者名	天久瑞香							
編集機関	那覇市 市民文化部 文化財課							
所在地	〒900-8585 沖縄県那覇市泉崎 1-1-1 TEL098-917-3501							
発行年月日	西暦 2024年 3月 31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
識名原遺跡	沖縄県 那覇市 識名	47201		26° 12′ 12.53″	127° 42′ 34.3″	20210607～ 20210622	90	グループ ホーム 建設
所取遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
識名原遺跡	集落跡	グスク時代～近世		ビット 溝 土坑	中国産青花、本土産磁器、沖縄産施釉陶器、カムイヤキ、土器、瓦	住居跡に関連するビット群などを検出した		
要約	<p>今回の調査は、民間運営のグループホーム建設に伴う緊急発掘調査である。</p> <p>調査地は周辺地形から識名原遺跡の緑辺部にあたと想定されており、近現代の建物による攪乱を受けながらも、敷地内の東側を中心に遺構の残存が確認できた。</p> <p>遺構と同時期の遺物包含層は残っておらず、地山面にビット群をはじめとする遺構を検出した。ビット群は建物あるいは柵列の柱穴である可能性が高いと考えられる。</p> <p>遺構の埋土からはカムイヤキやグスク土器が出土したが、胴部小片がほとんどであった。</p>							

---

那覇市文化財調査報告書第119集

## 識名原遺跡

—「(仮称)すまいるグループホーム識名」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—

発行 2024(令和6)年3月31日  
那覇市  
〒900-8585 沖縄県那覇市泉崎1-1-1

編集 那覇市 市民文化部 文化財課  
TEL 098-917-3501  
FAX 098-917-3523

印刷 沖縄自分史センター株式会社  
〒903-0804 沖縄県那覇市首里石嶺町4-288  
TEL 098-960-4104  
FAX 098-960-4105

---

